

〈夕紀の今月の一句〉

つつましきかたち暗きに火消壺

宇佐美魚目

火鉢を使っていたころ、火のついた炭を片付けるのに使ったのが火消壺である。この壺に入れることによって、空気が遮断され炭の火が消えた。暗い廊下の隅に目立たないように置かれていたに違いない。どこの家庭にもあった火消壺だが、日本家屋の中でもっともつつましやかに置かれていた、その奥床しい佇まいに魚目は美を発見している。

〔『薪水』平成元年暮の作。魚目六十三歳。〕

〈夕紀の今月の一句〉

早紅葉やなみだに揺れて山と空

宇佐美魚目

早紅葉は初紅葉のことか。他の木に先駆けて紅葉している葉のことだろう。理由はわからないが、作者の目には涙が溜まってきている。今まではつきり見えていた山が、空との識別さえも危うくなっている。悲しい涙か、悔しい涙か、或いは嬉しい涙か作者は明かしていない。しかし、澄んだ調べは、一人静かに涙していることだけを伝えたいようだ。

（第四句集『紅爐抄』より。昭和五十七年作。五十六歳）

〈夕紀の今月の一句〉

巢をあるく蜂のあしおと秋の昼

宇佐美魚目

見えないものを描きたい、とよく言っていた魚目にこんな句がある。これは聞こえそうもない音をさも聞こえたように描いている。前書があり、「木曾 灰沢 三句」、その真ん中の句である。他の二句は、「紙魚のこゑ聞きしや山の湯に二日」「蜂の巢やねむりて指のひらきたる」である。とすると、読んでいたのは中国の奇譚で、夢の中で、蜂の国に迷い込んだのではないか。この句、蜂が作者と同じサイズに感じる。小さくなった魚目に蜂の兵隊が近づいて来る足音だろうか。「秋の昼」という季語が静謐を導き出している。

この句は魚目の代表句の一句で、人気作である。昭和五十八年五十七歳の作、『草心』所収。

〈夕紀の今月の一句〉

熱湯は連珠のごとし山霞む

宇佐美魚目

春浅い山が見える部屋の炉か、或いはストーブだろうか、火にのっている大薬缶から大きな急須へたっぷりと熱湯を入れる。その湯が玉を繋ぎ合わせた連珠のように見えるというのである。作者は流れ落ちる熱湯を凝視している。魚目は多分お茶を振舞われた方だろう。一連の気取りのない動作を眺めているのだ。周りの山々は霞がかかり、まだ寒さが残っていたことだろう。

昭和四十九年作、魚目四十八歳。『秋収冬蔵』所収

〈夕紀の今月の一句〉

雪吊や旅信を書くに水二滴

宇佐美魚目

魚目は書道教授を生業にしていた。子供の頃から習字は得意で、子供ながら自分のやり方で練習し師を驚かせたらしい。そのやり方というのは、じっくりと手本を眺め、得心がいった時点で筆を持ち、一気に書くというもので、書いた半紙を手本と合わせると、ぴたっと手本の字と魚目の字が重なったというのだ。だから時間はそれなりにかかるが、半紙は二枚しか使わなかったらしい。

掲句は雪国の旅だろうか。携帯用の小さな硯に水滴から水を二滴落として墨をする。はがきを書くにはこれで充分足りるのである。外は雪景色。いつものように筆を進める。

『『天地存問』昭和五十一年五十歳の作』

〈夕紀の今月の一句〉

たくあんをいたくも喰ひし獵夫あり

藤田湘子

酒の肴に沢庵をぼりぼり食べている中年の獵師の姿が浮かぶ。獵の後の歓談の一コマか。「漆黒の急階段や狩の宿」「狩の犬坐しももいろの舌を出す」「革袋して獵銃の重さ増す」「獵銃を持たせてもらひすぐ返す」などの句が近辺にあるので、吟行に行つたものか。最後の獵銃の句はよく取り上げられる句である。しかし、私はこの沢庵の句の方が好きだ。湘子は山の生活者を如実に見せて、同じ世代の獵師の沢庵好きに共感しているのである。

『二個』所収。昭和五十八年五十七歳の作。